認識論における〈基礎づけ主義〉と〈反基礎づけ主義〉との攻防

——〈認識論無用論〉の系譜とそれに対する認識論の側からの応答——

松本俊吉

はじめに

一般に認識論的な哲学の一つの主要な特徴として、〈基礎づけ主義〉ということを挙げることができる。すなわちそれは、われわれの知的活動の基礎をなしそれを可能ならしめている——ないしは根拠づけている——スタティックな形式的体系の提示をその目標とするものである。一方これに対するアンチ・テーゼとして、われわれの知的活動はもっと多面的・ダイナミカルなものであって、そのような固定的な形式的体系によって汲み尽くされるものではないと考える〈反基礎づけ主義的な〉立場が存在する。これら両思潮の対立は、カントが最初に典型的な認識論的体系を提出して以来（もっとも場合によってはデカルト、さらにはアリストテレスにまで遡らねばならないのであろうが）、西洋哲学史上の様々な局面において顕在化してきた。そこで本稿は、カントvsヘーゲル、カントvsロック、現代科学論、現代知識論という諸事例（もっともこれらの事例相互の間の必然的連関はほとんどないが）をケース・スタディとして選び、それらにおける上の両思潮の対立点を浮かび上がらせてみたい(1)。

1　カントの認識論哲学とヘーゲルの認識論無用論

カントの〈超越論哲学〉ないし〈理性批判〉が、現在認識論哲学として理解されているものの最も典型的な範例となっていることに対してはおそらく異論はあるまい。カントにとっての「理性」とは、不変かつ自己完結的な、自存する、いわば〈レディーメード〉の有機体の如きものであって、その内的原理が（おのれ固有の内的表象に対する〈反省〉ないし〈内観〉という特権的方法によって）いったん発見されてしまえば、理性に属する何物ももはやわれわれの前にあらわとならずにはいない。従っ

て、究極的にはわれわれ人間理性の本性を究明する学である超越論哲学自身に関しても、その完全かつ最終的な輪郭を描くことができ、それを「後代のための、これ以上決して増加されえない資本」として保存することができる。「何か為さるべきことが残っている限り、何事も為し終えられない」(『純粋理性批判』)。

これに対する一つのアンチテーゼを提出したのがヘーゲルである。彼によれば、精神は静態的・出来合いのものではなく、動的に自己展開することによっておのれを陶冶・形成していくものである。従って学の体系というものも一挙に与えられるのでなく、歴史的に形成・発展しつつ完成に向かうものである。(もっとも、彼はいわば〈神の視点から〉この学の発展を俯瞰し、自らの体系をこの発展の終局点に置くという点において、言うなれば〈歴史主義的なポーズ〉を取っているだけなのかも知れないが。)

こうした観点からカントとヘーゲルを対比することは、もちろん一面的の誹りを免れない。けれどもこうした対比は一般に、われわれの知的活動の基礎をなすスタティックな認識の体系を〈一挙に永遠に〉(once and forever)提出しようとする基礎づけ主義的哲学と、それに対するアンチテーゼとして認識とその外部(主体と客体)とのダイナミカルな相互作用ないしはわれわれの知的活動の歴史的・社会的・文化的な〈存在拘束性〉といった次元に着目する、反基礎づけ主義的哲学ないし歴史主義的哲学との対立点を特徴づけるための図式として、有効であると思われる。以下ではこの対立図式が、大なり小なりこれから概観していくことになる他の対立事例においても下敷きとなっている事情を見ていきたい。しかしそれに先立って、もう一つ別の観点からカントとヘーゲルとの対立点を見ておきたい。それは本稿の副題にもある〈認識論無用論〉に関わるものである。

ヘーゲルは、カント的な「理性批判」の構想――すなわち対象認識に先立ってあらかじめわれわれの認識能力を吟味しその限界を規定するという「予備学」としての認識論の構想――を、あたかも水に飛び込むことをせずに泳ぎを習おうとするが如き本末転倒した企てであるとして批判する。なぜなら認識能力という「道具」を吟味するとは、それを認識することに他ならず、すでに何らかの形でその道具を行使することなしにはそうした企ては不可能だからである。そしてヘーゲルは「認識論主義者」たちに対して、こうした輩はこの現実の世界の実相つまり実在する物自体の把握という困難な仕事に潔く着手するだけの勇気を持っておらず、単にそうしたおのれの

優柔不断を糊塗するために、〈予備学〉などと称してあたかもまじめに学に取り組んでいるかの風を装っているにすぎないのであると、一種の〈イデオロギー批判〉を浴びせかける。

ヘーゲルのこの〈認識論無用論〉には、認識能力の分析などという形式的でスポイルされた作業にいつまでもかかずらわっていないで、大胆に「絶対者の把捉」という「宝の山」を求めて「意識経験」という冒険の旅へ――すなわち現実の歴史のただ中へ――踏み出でよ、という挑発的な含意が見て取れる。これは現代的にパラフレーズして言えば、「書物を捨てて街へでよう」とか「いい加減にモラトリアムを切り上げて社会にでなさい」といったお説教に対応していようか。

しかしこれに対しては、認識論の側から次のような比喩を用いた応答が可能である。ヘーゲルは対象認識に方法論は不要でありいきなり事を始めればよいと言うが、これは何の装備もなしにいきなりエベレストに登ろうとするが如き無謀なやり方である。確かに中にはこうしたやり方で登頂に成功する者がいるかもしれないが、それはその者が並外れて強靭な体力を有していたか（例えばメスナーのように）、或いは単に運が良かった場合の事である。要するにヘーゲルの態度は、一部の〈超人〉にのみ通用する英雄主義であって、しかもそれは方法論抜きの〈場当たり主義と裏腹の英雄主義〉だと言える。それに対してカントの認識論は、誰でもがそれに従えば確実に目的を達成できるような方法論を提供する。同時にそれは、目的を達成してもいないのに達成したと主張する輩――例えば「われこそは〈世界精神〉の体現者なり」と私念するヘーゲルのエピゴーネンなど――が輩出するのを防止するためのルールでもある。およそ学問にこのようなルールが欠けておれば、その達成の客観的な評価ということは不可能になってしまうだろう。

2　カントの〈論証的〉哲学とロックの〈物語的〉哲学

第二のケース・スタディとしてカントとロックとの対比を取り上げる。もっとも当日のシンポジウムで稲生氏も指摘されたように、この対比は必ずしも上述のカントとヘーゲルの対比と重なりあるものではない。カントという同一の〈基礎づけ主義者〉に対するアンチ・テーゼにも様々なヴァリエーションが存在するのであり、その意味でまさに「敵の敵は必ずしも味方でない」のである。

＊　　＊

カントは〈事実問題〉と〈権利問題〉とを区別している。これらは元来法律用語で、前者は裁判における事実

経過の報告に関する手続き、後者はそれらの報告された事実の法的評価に関わる手続きを指していた。カントはこれらの用語を認識の問題に転用して、われわれが所有している概念がいかなる経過を辿って獲得されたかという説明を事実問題と呼び、そしてその概念の所有が正当であるか否か――すなわちその概念が果たして客観的根拠を有するものであるのか否か――という点の確定を権利問題と呼んだ。すなわち権利問題とは、懸案となっている概念が単なる主観的な思惟の産物（例えば「丸い四角」とか「現在のフランス国王」などを想定してもよいだろう）ではなくて、何らかの実在する対象の概念であることを〈正当化〉するための問題構制だということになる。そして彼はこの正当化のための論証を「演繹」と呼んだ。彼にとって哲学の本来の課題はあくまで権利問題であって、事実問題はせいぜいそのための補助的手段としての役割しか有していない[2]。

ところで、権利問題における正当化の論証は、カント本人はそれを承諾するが他の者は承諾するもしないも随意のものとして考えられているのでは無論ない。それどころかこの論証は、一旦確立されたが最後、後の時代までも万人がそれを承諾し受け入れるべきものとして意図されている。すなわちそれは、合理的に思考する者――すなわち論証的推理の必然性を受け入れる者――ならば誰でもが受け入れざるをえない〈演繹〉という手段によって自らの論点を〈有無を言わさず〉承服させようとする意図を有するものである[3]。従ってそれは、確かに〈論証〉という間主観的・公共的な手続きをとってはいても、一種の〈御宣託〉であり、裁判官の判決と同様の拘束力を要求するものである。（実際カントは、『純粋理性批判』において自らを裁判官のイメージに重ね合わせているところがある。）これは〈民主主義の仮面を被った専制〉と言えないこともない。

さて、これと好対照をなすのが、事実問題的なアプローチをとっているという意味でカントが「人間悟性の生理学」と呼ぶところの、ロックによる発生論的知識論である。ロックは、内観心理学的な手法を用いて、「内省」と「感覚」という「窓」を通してわれわれに与えられた「観念」がいかにして比較され・結合され・再生されてわれわれの知識となるのかを、いわば〈物語風に叙述〉(storytelling) する。（ロックの言い方に従えば、「事象記述の平明な方法」(plain method for historical description)。）彼には、自分の語っている物語が真なる物語であるとか、唯一可能な物語であるとか、自分以外の人も当然それを受け入れ信じねばならないものであると

かいった〈過剰な思い入れ〉はない。彼が期待するのはせいぜい、自分の物語が一つのもっともらしい、説得力のあるものであるということにすぎない。これは、哲学者というよりもむしろ歴史家のメンタリティーに近い。というのも、歴史的な事象は常に〈別様にも起こりえた〉という性格を有しており、これは哲学者の扱う対象とは異なって、絶対的必然性やオルターナティヴの排除といった事柄を要求するものではないからである。

以上のことから、カントの哲学を〈論証的哲学〉、ロックの哲学を〈物語的哲学〉と呼ぶこともできるであろう。前者は、われわれ人間に普遍的に備わっておりあらゆる経験的認識の基礎にあってそれを可能ならしめている、いわば〈知の構造〉の客観的妥当性を論証によって〈基礎づけ〉ようとする。それに対して後者は、われわれ人間が経験的に知識を獲得する仕方に関する一つのありうるでもあろう〈生成的・発生論的説明〉――すなわち、最終的な被説明項である経験的知識の成立に至るまでのプロセスにおける主要な段階を時系列的に列挙するという説明法――である。前者の特徴を一言で〈押しつけがましさ〉と表現するとすれば、後者の特徴は〈気楽さ〉であると表現することもできよう。

ところで、こうしたカントとロックの方法的差異と類比的な差異を、われわれは近年の物理学の内部に見いだすことができる。一方は従来の演繹的・要素還元主義的・〈基礎づけ主義的〉物理学であり、他方は昨今の宇宙論に特徴的な記述的・全体論的・〈歴史主義的〉物理学である。すなわち前者では、われわれの経験する所与の自然現象をより基底的なレベルの原理・仮説から演繹的に説明するというスタイルがもっぱらとられているのに対して、後者では基本的な方法論は従来のものを踏襲しながらも、宇宙開闢以来の〈自然史〉ならぬ〈宇宙史〉を一つの可能でもあるような仕方で叙述するという、従来にはなかった〈歴史的な〉観点が導入されている。従来の物理学では、現実にわれわれが生きている世界であろうとなかろうと、およそいかなる世界においても〈普遍的に〉妥当する（と信じられている）根本原理――例えばニュートンの運動の法則やアインシュタインの宇宙方程式など――を究明することを至上命題にしていたのであるが、近年の宇宙論、特にビッグバン理論において物理学者たちは、「われわれが現在生きている宇宙（世界）が現にあるように存在し、それ以外の存在様式をとらなかったのはなぜなのか」といった、現実に起こった出来事の〈一回性〉を説明するという歴史学の課題とも相通じる問いに、初めて正面から取り組むようになった。ま

たさらに、後者においては、宇宙生成の歴史を遡っていくと宇宙開闢の時点で物理法則が破綻する〈数学的特異点〉が現れざるをえないことが理論的に証明され、いわば最初の〈神の一撃〉が物理学の内部から要請される事態にもなっている。このことは、数学におけるゲーテルの〈不完全性定理〉にも似て、自らの公理体系の適用限界（不完全性）を自ら証明することによって、普遍妥当性を志向する従来の理論的態度に制限を課すことを意味している。

3　現代科学論における基礎づけ主義的趨勢と歴史主義的趨勢

基礎づけ主義対反基礎づけ主義（歴史主義）の対立の構図は、現代の科学論においても顕在化している。以下では前者と後者をそれぞれ、〈分析的科学論〉と〈弁証法的科学論〉と呼ぶことにしよう。

〈分析的科学論〉を特徴づける最も重要な点は、〈インターナル・アプローチ〉である。すなわちそれによれば、科学論の主要な課題は、科学内部の既成の理論体系に関する論理的・方法論的分析――換言すれば科学における〈認識の問題〉の解明――にある。これに対して〈弁証法的科学論〉を特徴づけるのは、〈エクスターナル・アプローチ〉である。すなわちそれによれば、科学論の主要な課題は、科学とその存立の可能性の条件としての社会的諸条件とのかかわり――すなわち〈上部構造〉としての科学が〈下部構造〉としての社会的諸条件によっていかに規定されているかという点――の解明にある。あるいは考察の範囲をより狭く限定する場合でも、科学を基本的に研究者集団という〈生身の人間の集まり〉による歴史的産物として把え、出来合いの理論の論理的分析よりもむしろ、こうした人間集団の心理学的・社会学的分析を重視する。

ここで私が〈分析的科学論〉として念頭に置いているのは、主としてK・ポパーを代表とする「批判的合理主義」の一派、そして論理実証主義の流れを汲む英米系の科学論・科学哲学である。一方〈弁証法的科学論〉としては、主としてマルクス主義的科学論、そしてその主張が若干の点でこれと共通点を有している、T・クーン等の新科学哲学派およびそれに触発されて流行となった科学社会学的アプローチを事とする人々のことを考えている。ポパーの「批判的合理的主義」の主張とクーンらの「新科学哲学派」の主張がいくつかの本質的な点において鋭く対立し、広範な論争を巻き起こしたことはよく知られている。しかし他方で「批判的合理主義」は、広義

のマルクス主義的科学論の一派であるアドルノ、ハーバーマス等の「フランクフルト学派」とも、社会科学の方法論をめぐる論争を巻き起こした。「ドイツ社会学における実証主義論争」と呼ばれるものである。以下では紙幅の都合もあるので、後者の論争に的を絞りそこにおいて本稿の主題である基礎づけ主義と反基礎づけ主義の対立が色濃く反映されている点を見ておきたい。

この両者の対立は、結局のところ私がすでに第一節で述べた、カント主義とヘーゲル主義との対立に帰着する。「批判的合理主義」の見解では、「科学の客観性」とは科学理論そのものの客観性のことではなく、むしろ提出された科学理論を検証・吟味する「批判的方法」の客観性（すなわちそうしたチェックシステムが確立されていること）の謂いである。そしてそれは結局、その方法論の基礎原理となっている演繹的論理学の客観性のことである。（modus tollens:p→q,～q→～pが反証理論の基礎。すなわち、ある一般的仮説から演繹された個別的帰結が偽であることが示されれば、もとの仮説の妥当性も否定されるというわけである。）これは、カントが認識の客観性というものを、認識の対象それ自身の実在性にではなく、認識主観の形式（カテゴリー）の客観妥当性に求め、「物自体」に関しては不可知論を主張したことと相即するであろう。

一方「フランクフルト学派」の見解では、「事態そのもの」――すなわち社会的現実――は研究者の主観に先立ってすでにそれ自体として構造的連関を形成しており、研究者の仕事はこうした構造的連関を〈見つけ出し〉、それに適合する理論を〈構築する〉ことである。従ってその際、あくまで「理論」を「事態そのもの」に適合させなければならないのであって、その逆ではない。それゆえ方法論的規範などといったものは必要ではなく（いわば、「方法は対象の側からやってくる」）、ましてや事態そのものが演繹論理学の論理法則に適合せねばならない理由などない。以上の論点は、さきにわれわれが概説したヘーゲルの認識論無用論――すなわち、われわれは「認識の道具」を用いることなくとも立派に対象そのものを把捉できるのだから、あらかじめこの道具の性能についてあれこれ詮索しておく必要はないという見解――と通底し合うものであると同時に、カントの「超越論的観念論」（「認識」が「対象」に従うのではなく「対象」が「認識」に従う）に対するアンチテーゼをも含んでいると言えよう。

ところで現代の科学論においては、〈分析的科学論〉に特徴的なインターナル・アプローチから、〈弁証法的

科学論〉に特徴的なエクスターナル・アプローチへと、ますます重心が移行しつつある。確かに従来の、科学の客観性・価値自由性といったことを自明視しそれを無条件に学の規範として仰ぐ〈科学の婢〉の立場に甘んじることによって、逆に他の〈発展途上の〉諸学に対する優位を維持しつつそれらに学の規範を指南しようともくろむ新カント派・論理実証主義的な態度は批判されるべきである。けれども一方、これらの〈分析的な〉諸学派が、かなりの程度科学の内部構造そのものに肉薄し、科学に対して単に〈外在的〉でない批判的視点を持ちえてきたこともまた事実である[4]。従って――少々誇張して言うならば――、「科学と社会」とかいったテーマで論文を書きさえすれば一人前の研究をしていると見なされる――しかし実際はその中身は科学の周辺での細々とした史実の寄せ集めであったりする――ような昨今の風潮は、私にはあまり生産的なものだとは思えない。

四　現代の知識論における反基礎づけ主義としての〈自然主義〉と〈プラグマティズム〉

自然主義

現代の知識論・科学哲学における自然主義というとクワインの「自然化された認識論」が有名であるが、私はここでは「自然主義」という語を、広く一般に哲学的認識論・哲学的基礎づけ主義に対する心理学・生理学・物理学・生物学などの自然科学の側からの〈異議申し立て〉に共通してみられる議論の構造として理解したい。

すなわち哲学的認識論は、いかなる心理学的・生理学的・物理学的・生物学的アプローチによっても到達不可能な〈彼岸〉としての人間の本質――これは学派によって〈自己意識の明証性〉であったり、〈訂正不可能な生の感覚的経験〉であったり、〈所与の感覚的多様を綜合・統一する主観の能作〉であったりする――が確かに存在すると考え、そういった領域をおのれのテリトリーとして固守しようとする。

それに対して、心理学は「われわれ人間の思考に関して心理学で扱えないような対象で認識論に扱えるものが何か残っているのか?」という疑問を投げかけるであろうし、生理学は「われわれ人間の認識とか思考とか感覚とかいったものも結局、脳や感覚中枢における神経生理学的なプロセスによってあまねく規定されているのだ」と主張し、物理学はさらに「結局そういったプロセスも含めた全ての自然現象はこの自然界を構成している素粒子の相互作用の法則によって支配されている」と主張するであろう。

また生物学は、やれ〈万物の霊長〉だ〈ホモ・ロクエンス〉だ〈コギト・エルゴ・スム〉だと言っても、結局われわれ人間は生命誕生以来40億年の進化の歴史の果てにようやく地球上に現れた〈新参者〉にすぎず、かつて恐竜が繁栄した以上の期間にわたって今後この地球上で繁栄を享受できるかどうかさえさだかでない[5]のであるから、そうした生物進化の一到達点にすぎない人類という種の〈本質〉の〈普遍性〉云々を哲学的・論弁的に基礎づけることにいったいどれほどの意味があるのか（それは、自分の座っている椅子を座ったまま自分で持ち上げようとするが如き企てに類するものではないのか）、むしろわれわれ人間の〈思考〉能力は、微力な哺乳類としてのわれわれが環境に適応し自然淘汰を生き抜くための一つの手段・道具にすぎず、二足歩行したり火を使ったりすることと同レベルの能力なのではないか、という疑義を提出するだろう[6]。

これらは従来の〈認識論〉に対する強烈なカウンターパンチである。要するに〈自然主義〉とは、われわれ人間の何らかの特性を特権視することを排し、それをわれわれの意識にとっては〈外的・自然的〉である〈環境〉のなかの一事象として、他の自然的な対象と同一のレベルで〈基礎づけるのでなく〉記述する態度であるということができよう。けれどもこれらの諸批判に対しては、認識論の側から次のように答えておきたい。

これらの自然主義の主張は（心理学を別として）概して、各々の個別探求領域で得られた知見が、そのまま地続きに（人間も自然の一員であるという素朴な根拠によって）われわれ人間の思考とか認識という領域にも適用できるはずだ、という一種の希望的推測ないし〈外挿法〉(extrapolation) に基づいている。従って自然主義者たちは意識しているにせよいないにせよ、彼ら自身をも含めたこの世界を〈外在的〉かつ〈客観的〉に観察する視点に立つことを、自らに許している。けれども、現実には彼らといえども〈この世界の内部で〉思考し、認識しながら探求している人間なのだというこれも同様に素朴な事実を想起するならば、われわれは決してそのような鳥瞰的視点から自らの認識について語ることは許されないこと、従って人間以外の自然の対象と人間の認識作用との間には〈圧倒的な非対称性〉が存在するということを、認めないわけにはいかないだろう[7]。それゆえ自然主義者たちが、「人間の認識といえども自然の対象にすぎない」という〈認識〉を、自然の対象について元来要求することができる以上の〈客観的真理〉として主張するとしたら、彼らは〈嘘つきのパラドクス〉と同様の自

己論駁的な主張をなしていることになる。換言すれば、自然主義者は単なる〈外挿〉にすぎない彼らの主張を〈客観的テーゼ〉として主張し始めるや否や、背理に陥る。以上は通常〈自然主義のパラドクス〉として呼ばれる事態である。

プラグマティズム

この自然主義とは違った角度から、しかし場合によってはそれと連携しながら、特にアメリカ哲学において認識論的哲学に対する強力な反対勢力を形成しているのが、プラグマティズムの哲学者達である。ここではその現代における最もラディカルかつ刺激的な論客であるR・ローティの主張を見てみたい。

ローティによれば、いわゆる〈認識論〉がカント以来二世紀にわたってアカデミズム哲学の主流となりえたのは、哲学教授職が大学において制度化され哲学が体制化し始めたちょうどその時に、カントが「正当化」とか「確実性」といったデカルト的要求を哲学の自己イメージの中に吹き込んだという歴史的・偶然的な事情によるものである。従ってそうした出来事は、まさに「文化的な不幸」(caltural disaster)としか言いようがないものであった。

その後前世紀の終わりから今世紀の初頭にかけて、(ヘーゲルやマルクス、あるいはニーチェやベルグソンやディルタイといった人々の影響もあって)いったんはこうした確実性や厳密さを追求する「まじめな」風潮が衰退し、歴史主義的思潮あるいは「遊びの精神」が哲学の中に入り込もうとしていたかに見えたが、今世紀初頭のフッサールとラッセルの出現によってせっかく勃興したこうした思潮は駆逐され、哲学は再びカント的なパラダイムに支配されるようになってしまい(もっとも今度は数学的論理学にその拠り所を求めたのであるが)、そうした情勢はその後40年近く続くことになった。

けれどもその後現象学も分析哲学も、その創始者の学説の異端的な継承者達(サルトルやハイデガー、クワインやセラーズ)によってこのパラダイムから抜け出しつつある。すなわち現象学はフッサールが「単なる人間学」と絶望的に呼んだものへと次第に変貌していったし、「分析的」認識論——すなわち「科学哲学」——は(ハンソン、クーンに見られるように)次第に歴史主義的な色合いを濃くし逆に論理的な色彩を薄くしていった。

こうした歴史的総括を踏まえて彼は、次のような〈処方箋〉を与える。上述のようにこれまで哲学者の「脅迫観念」となっていた「基礎づけ」への要求が歴史的偶然

によってわれわれに課されたものでしかないという事実を受け入れるならば、われわれはいまや、「確実さへのデカルト的な神経症的要請」や、〈理性の法廷〉の主宰者たらんとする意志や、超歴史的に妥当する規範を立てようとする野心を捨てるべきである。そしてそうした企ての背後にある「実在に対応しているがゆえに客観的・普遍的に妥当する真理」なる観念も放棄されねばならない。むしろ「真理」なるものがもし存在するのであるとすれば、それはその有効性が社会的・共同体的合意によって保証されている命題以外のものではありえない。それゆえわれわれの文化とか制度といったものも、われわれ自身の仲間からそれを継承し彼らと「対話」することによってしか維持されえない。従ってわれわれのなすべきことは、「永遠の真理」を求めて「孤独な心的生活」に引き隠ることではなく、むしろこうした社会的合意が成立する機制を解明するために、歴史的あるいは文化的伝統の中に分け入り虚心坦懐にひたすら「対話」を続けること以外にはない。そしてその際には哲学は、カント的な「体系的哲学」(systematic philosophy)から、ソクラテス的な対話を促進させる〈助産術〉としての「啓発的哲学」(edifying philosophy)へと移行していかざるをえないだろう。以上が彼の主張の(目下の主題に必要な限りでの)論旨である。

以上のようなローティの主張は、かなりの説得力とインパクトを有している。特に、〈認識論〉なる哲学的形態の成立事情とそれが一定の影響力を保持してきた所以を歴史的に丹念に後づけることによって、まさにその〈歴史性〉を暴露するという手法には、見るべきものがある。しかしそれにもかかわらずわれわれは、以下のような疑義を抱く。

第一に、認識論哲学の欺瞞性を暴く彼の徹頭徹尾〈イデオロギー批判〉的なやり方は、確かにこれから哲学研究に乗り出していこうという若手研究者に認識論に対する幻滅観を抱かせる効果は十二分に有しているとしても、その反面彼が対案として主唱する〈プラグマティズム〉あるいは〈啓発的哲学〉を何か暫定的で消去法的で破れかぶれ(自社連立内閣のように)なもの、ないしは常識的であるという以上にはさして魅力を感じさせないものであるかのように思わせるということである。

第二に、彼の〈対話至上主義〉の本末転倒性が指摘できる。彼は対話することには何の目的もなく単に「ソクラテス的対話の活動が、それ自体目的である」と述べ、さらには対話において何らかの合意に達することさえ不必要であると説く。「合意こそ対話の目標であると主張

する反プラグマティストたちは、得点をあげることがゲームをする理由であると考えるバスケットボール・プレーヤーに似ている。彼らは、活動の過程における本質的契機を、活動そのものの目的と勘違いしている」。けれども、何らかの共通な問題がありそれを解決し合意に達するという課題があって初めて、有意義で実りある対話が可能になるのではないだろうか。その際対話を真に実りあるものにするためには、それに則って対話が進行し、それに照らして対話内容が評価されるような何らかの基準・規範・ルールといったものが必要であろう。こうした基準を欠いては対話が不可能となるか、たとえ可能であったとしても単なる水掛け論争か一方的な自己の立場の表明に終始してしまうことになろう。認識論哲学ないし超越論主義の課題は、このような共通の基準ないしルールとなるものを探求し、対話を可能ならしめる基礎を提供することにあるのであって、決してそれはローティの言うような対話を軽視した独善的な営みではない。

おわりに

〈認識論〉は、以上で見てきたような反基礎づけ主義陣営の諸批判に対してほうかむりをして、何事もなかったかのように〈わが道を行く〉ことはもはや許されない。順風満帆のときは「諸学の基礎を提供する」と公言し、旗色が悪くなるや否や「哲学上の一専門分野」を決め込むわけにはいかない。その意味でこうした諸批判に目をつむるのではなく、それらに積極的に応答していこうとする前向きな態度が必要であろう。（その意味ではローティの言うように、〈対話〉は大いに結構である。）しかし一方で、この世界に〈投げ出された〉有限的存在としてのわれわれ人間の、そもそもの出発点における偶然性・不確実性といったものを克服し、自らの思考基盤をより確固としたものに近づけていこうと努めるという広い意味での〈認識論〉ないし〈基礎づけ主義〉のテーマは、時代が変遷しわれわれの知識や技術が進歩したからといって過去のものとなってしまうことはないと私には思われる。むしろこうしたテーマは、われわれ人間の一人一人はその都度〈一から〉自らの生を引き受けていかねばならないのである限り、いつの時代にも繰り返し問題とされざるをえない〈永遠の課題〉（月並みな表現ではあるが）であると思われる。

注

(1) 最初にお断りしておかねばならないが、過日の若手ゼミシンポジウムにおける私の報告は、昨年度の『哲

学の探求』に掲載していただいた拙稿「歴史と認識」を基にして加筆・訂正を施したものであり、それと内容的に若干重複していた。したがってシンポシウムの報告の載録である本稿に関してもまた、事情は同様である。

(2) この事実問題の蔑視は、新カント派によってさらに徹底化された。けれども近年になってクワインが、「自然化された認識論」によってその復権を企てた。

(3) *Our Knowledge of the external world*, 1914 の中でバートランド・ラッセルが「哲学の本質としての論理学」について語った次の言葉は、こうしたカントの意図との著しい類似性を見せている。曰く、「新しい論理学はガリレオが物理学に導入したのと同じ種類の進歩を哲学にもたらし、ついには、いかなる種類の問題が人間の能力を越えるものとして放棄されねばならないかをわからせてくれた。そして、解決が可能であると思われる場合には、新しい論理学は、単に個人的な好みを表すのではなくて、意見を述べる能力のある人なら誰でも同意せざるをえないような結果を得るのを可能にするような方法を提供するのである」（傍点筆者）。

(4) 例えば論理実証主義の祖と言われる、哲学者でありマルクス主義者からは「バークリー的観念論を焼き直したにすぎない」などと言われ〈死せる犬〉の如き扱いを受けてきたが、彼は当時の物理学の体制的思想である〈ニュートン主義〉ないし〈力学万能主義〉に対して〈熱力学的世界観〉とでもいうべきアンチ・テーゼを突きつけて敢然と立ち向かい、結果として今世紀初頭の物理学の革命に道を開いたのであり、その意味で優れて〈弁証法的〉な役割を担った人であると言うことができる。

(5) ちなみに、現在が元日の午前0時0分0秒であると仮定して、地球上に生命が誕生した時点をちょうど一昨年の元日の午前0時0分0秒であると見立てれば、人類が登場したのは去る12月31日午後7時30分頃であるという。

(6) あるいは〈おつむ〉のレベルではしかつめらしい議論を展開していても、結局一生物種としての人間を決定する遺伝子のレベルではわれわれも単なる利己的な生きものでしかない、と主張するかも知れない。

(7) もっとも、他者の第三人称的な認識について外在的な視点から語ることは可能である。しかしこうして語られる認識からは、哲学的認識論の扱う本質的な部分

はすでに抜け落ちている。

（まつもと　しゅんきち　東北大学）